

七月一日(日)、新潟ユニゾンプラザ四階大講義室で二百五十人をこえる人たちが午前午後の五時間をこえる話に聞き入っていた。新潟LD親の会「いなほの会」企画の今年度第一回講演会(設立七年目の講演企画)にまねかれた講師は大阪教育大学教授の竹田契一先生だ。平易で、親と教育現場の実情をよく掴んだ「LD児とADHD児」についての基調講演だった。印象深かったことはLD児は知恵遅れでなくて、聞く話す、読む、書く、計算する、または推論するという認知面の能力の障害であり、ADHD児は自己コントロール力がうまく働かない行動面の障害であるという基本認識のていねいな解説や、この障害は脳の発達のも未成熟というアメリカなどでの研究の紹介、左脳・右脳の原理的な働きへの認識が大切だという指摘など、さらにこの子どもたちが学習過程でどこでつまずくか、それをどうサポートして人間的な発達を援助して行くかという教育活動への具体的なたくさんのお話があったことだった。

詳細は後の機会にゆずることにして、考えさせられ

たことをのべてみたい。参加者の中にたくさん若いの女の先生方がいて講演後、真剣に質問をされていた。教育現場で日夜に苦勞をされていることがうかがわれた。こうした基本的な学習の場が県下各地で丁寧に繰り返して展開されることが望まれているのだなーと実感した。それぞれの学校でその子どもにもふさわしい発達の支援体制を組むということは、教育活動が本来的に時間をかけた、集団的な活動であることの再発見、再評価をしてゆくことになる。また医師や大学の研究者等の専門家との教育的関係を構築することは学校教育が絶えざる教育科学を中心とする諸科学のあたらしい成果で検証されていることになる。このように、教員採用で教育者になったのではなく、教育者への研鑽の道がはじまったことが実践的にわかる取り組みがはじまったということが、当日の午後、新潟市の小学校でLD児とかわってこられた先生の実践報告でよくわかった。それにしても学ぶという原点をはなさず、多くのの人たちと支援体制をつくっていく「いなほの会」はすばしい。

(本)